



## つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 288号 2011.3.10 発行 社会政策研究所

=====

ニュースUP：障害者雇用率「最高」1.68%の陰で＝科学環境部・林田七恵

<おおさか発・プラスアルファ>

毎日新聞 2011年3月9日

### 主は非正規「解雇」横行

鉄道会社に大手保険会社、教科書出版社……。難病と闘う大阪市内の堀井孝則さん（29）の勤務履歴には名だたる企業が並ぶ。障害者雇用枠で採用されながら、「健常者より仕事が遅い」と唐突に解雇されたり、意に染まぬ転職を余儀なくされてもきた。堀井さんの半生をたどると、統計では分からない障害者雇用の実態が見えてくる。

### サポートなく

堀井さんは生まれて間もなく、先天性の難病「ムコ多糖症2型」と診断された。代謝がうまくできず臓器や組織の働きが失われる病気で、重症だと命にも関わる。そのため堀井さんには心臓に疾患があり、両耳に補聴器を付け、細かい字を読む時はルーペを使う。手足の関節も不自由だ。

国は従業員が56人以上いる企業などに、堀井さんのようにハンディキャップを抱える人を一定数雇うよう法律で義務付けている。会社によっては専用の採用過程を設けており、堀井さんも障害者枠で企業や自治体の採用面接を受けてきた。

09年10月に入社した大手保険会社でも、障害者枠で1年契約の嘱託社員になった。求人票には「障がい者の方にも働きやすい環境づくりを目指しています」と書かれていた。「細かい作業には、どうしても時間がかかります。それでもいいですか」。堀井さんが尋ねると、採用担当者は「大丈夫」と答えた。

しかし「看板倒れ」は働き始めた日に痛感させられた。堀井さんは目が不自由で、初めての職場で席やトイレ、業務に必要な物を自力で探すのは難しい。ところが案内されたのは自席だけだった。トイレの場所を聞こうと見回すと、近くの社員はさりげなく顔を背けた。仕方なく、会社を去る日までトイレは近くの駅で借りた。それでも書類整理の仕事に打ち込んだ。

ところが1カ月半たった、ある日の朝だった。「健常者よりも仕事が遅いから」との理由で解雇を言い渡された。試用期間すら満了していなかった。「障害者と分かってたんじゃないんですか」と言うと、人事担当者は「予想以上にスピードが違うと分かり、勉強になりました」と突き放した。

「それまで注意は一切なくいきなりの解雇です。健常者でそんなことがありますか」

### 派遣に置き換え

理解してもらえなかったのは、この会社に限らない。就労を巡る堀井さんの闘いは、病状が落ち着いた03年ごろから続いている。選考を通った後、健康診断で落とされることが続いた。くじけず40社以上の面接を受けた。

努力が実って04年に契約社員の職を得た鉄道会社では、大規模工事の会計も担当し、やりがいがあった。しかし06年に事務部門で派遣の受け入れが始まると風向きが変わってきた。従来の堀井さんの仕事は徐々に派遣に回された。06年秋には閑職に回され、仕事は一切なくなった。

データ整理などの仕事を自力で探したが、1年たっても好転しなかった。契約満了前の07年末、耐えきれずに辞表を出した。祖父や父と同じ鉄道マンは幼い頃からの夢だっただけに悔しかった。次の契約先でも社員から無視されたり体の特徴を笑われ、8カ月で辞職に追い込まれた。

堀井さんがこれまでに受けた会社のほとんどで提示された雇用形態は契約・嘱託だった。「将来を考え不安に思ったこともあるが、最近は先のことを心配するより働ける一日一日を大事にしています」と複雑な心境を吐露する。

厚生労働省は昨年10月、障害者雇用率が1・68%（昨年6月現在）で過去最高だったと発表した。しかし実態は堀井さんの体験が物語るように十分ではない。長引く不況の影響で、解雇される障害者の数も高止まり傾向だ。

厚労省によると、09年度に解雇されたのは2354人。非正規労働者の雇い止めや辞職に追い込まれた例も含めると実数はもっと多いといわれる。10年7月の法改正で、雇用率未達成の場合、納付金を課せられる企業の範囲が広がったが、効果は未知数だ。

### 「数合わせ」の側面

障害者の人権問題に取り組む「働く障害者の弁護団」代表の清水建夫弁護士（東京弁護士会）は、こう指摘する。

「多くの企業が法定雇用率の“数合わせ”のため、切りやすい非正規で障害者を雇っている。退職金もなく契約期間も限られた非正規では、労働者の権利を守りきれない。欧州などでは障害のある人がない人と共に社会で暮らすことが当然になっている。そのため雇用機会均等を保障する法制度や環境整備が進んでいるが、日本ではそもそも障害者が社会で働くことへの認識が十分に広まっていない。障害者が不安定な雇用形態を強いられる背景に、企業が労働者全般を大切に考えなくなっていることも挙げられる」

堀井さんは介護ヘルパーの母と一緒に家計を支え、8歳離れた弟の学費も工面した。闘病のため一度は大学進学を諦めたが、就職してから法政大（東京都）の通信教育部に入学し、全国に学友ができた。日本史に造詣が深く、史跡巡りの旅行記を同人誌に寄せては「小説家になれれば」と目を輝かせる。

幸い、現在の職場は仕事内容も人間関係も充実し、生まれて初めて名刺も支給された。ミスした時は「自立できるように頑張れ」と上司に叱られ、期待される喜びを知った。福利厚生も正社員並みで、年度をまたいだ仕事の指示も受ける。「非正規、正規雇用の垣根を越えて従業員を大切にしているから、安心して働ける」と話す。

前向きに生きる堀井さんならではの道は、ここまでの道のりは並大抵ではなかったはずだ。

障害者の雇用率や解雇者などの数に潜む一人一人に、堀井さんのように家族がいて、生活があり、夢がある。貴重な人生に対して、偏見があってはならないと思う。

**タイガー現象、なんか違う 施設出身者が13日にシンポ** 朝日新聞 2011年3月9日  
シンポジウムの内容を話し合うCVVのスタッフたち  
=大阪市中央区

児童養護施設への学用品のプレゼントをきっかけに全国に広がった「タイガーマスク現象」。匿名の善意の輪をメディアが感動的に取り上げる様子を「なんか違う……」との思いで見つめていた施設出身者たちがいる。「かわいそうな子どもとひとくくりしないで」。施設の実情や子どもたちが望む支援を知ってほしいと、当事者の声を伝えるシンポジウムを箕面市で13日に開く。



虐待や貧困、死別などの理由から、親元を離れて児童養護施設で暮らす子どもは全国で3万人を超える。昨年末、前橋市でタイガーマスクの主人公・伊達直人を名乗る人物がランドセルを贈ったことが「心温まる話題」として報じられたことをきっかけに、全国で連鎖反応が起きた。

「タイガーマスク現象ってどう思った?」。児童養護施設出身者らが10年前に立ち上げた団体「C V V」(大阪市北区)は2月末、メンバーの声を集めて会報に掲載した。

「施設のことを世間に知ってもらおう大きな一歩」と評価する声があった一方、「贈られる側への想像力が足りない」と抵抗感を訴える声も少なからずあった。

施設の子どもたちはこれまでも遊園地やプロ野球への招待など、寄付の恩恵を受ける機会はしばしばあった。施設で約4年間暮らしたC V V代表の徳広潤一さん(23)は「今回だけが特別に美談として扱われたことに違和感を覚えた」。常磐会短大講師の長瀬正子さん(33)は「施設の職員不足など、政治や行政が本来解決すべき課題が『いい話』にかき消され、うやむやになってしまった」と感じる。

N P O職員の新井智愛(ちえ)さん(27)も5歳から中学生まで府内の施設で育った。今回の現象に「かわいそうな子に恵んであげる」という「上から目線」を感じた。

施設にいたことを打ち明けると、少年院や障害者施設と勘違いされたこともある。実情をよく知らない人から「かわいそう」と同情され、「私ってかわいそうな存在なんだ」と思って自信をなくした。「施設は私の居場所だった。施設だからかわいそうと見るのは偏見。ニーズを踏まえない支援は偏見を助長するだけだと思う」

それでも、世間の目がむいたことをチャンスに変えようと、新井さんたちは施設の実情や当事者の思いを多くの人に知ってもらうためにシンポジウムを開くことにした。

施設の中にはボランティアを募集しているところもある。施設で暮らす子どもと週末と一緒に過ごす「週末里親」に登録する手もある。高等教育に進むのが困難なことや、施設を出てからの精神面・生活面のサポートが手薄なことなど、見過ごされがちな課題も多い。新井さんは「お金やモノの前に、心でつながりたい。どんな支えが必要で、自分に何ができるのか、当事者の話から考えてもらえたら」と話す。

シンポジウム「タイガーマスクの育ったところ～児童養護施設で育った若者たちのこえ」は13日午後2～4時半、箕面市萱野1丁目の「らいとびあ21」で。参加無料。問い合わせは、らいとびあ21・新井さん(072・722・7400)へ。(机美鈴)

## 命つなぐ 大切な人との写真展

自殺で親を亡くした大学生らが企画した「大切な人との写真」パネル展 = 札幌市中央区

家族や友人などの写真を集めて展示した「大切な人との写真」パネル展が札幌市中央区のかでる2・7で開かれている。10日まで。

自殺で親を亡くした札幌の大学生らでつくるグループ「ここわらねっと」が、自殺対策強化月間に合わせて、人とのつながりを改めて考えてもらおうと、企画した。同市東区の主婦、金山節子さん(60)は「どの写真も笑顔で明るい。家族の写真がいいですね」と話していた。

期間中、昨年の道内の自殺者数と同じ1533枚の写真を集める計画で、大切だと思う人との写真であれば誰でも応募できる。現在約1100枚集まり、このうち900点余り

朝日新聞 2011年3月9日





## 社説：自殺者3万人 心を開ける場所もっと

朝日新聞 2011年3月10日

ようやく転換の時なのだろうか。

警察庁によると、昨年の自殺者は9年ぶりに3万1千人台に減った。前年に比べ、34都道県で減少している。三重県は25%減、青森県は17%減と顕著に減った。13年連続の3万人台とはいえ、変化の兆しかもしれない。

年度末の3月は毎年、自殺が増える月で、政府は昨年から対策強化月間にした。さらに手を尽くしたい。

昨年、人口あたり自殺者数の割合が高い東北6県で軒並み減少したのに、平均より低い香川県、滋賀県、石川県などで逆に増えている。危機感の違いが対応の差になってはいないか。

東京、大阪といった都市部は横ばいだ。3千人、2千人もの人が死を選んでいる。2006年の自殺対策基本法が社会的な取り組みを強調し、多重債務対策や心の健康診断も強化したが、やはり決め手があるわけではない。

自殺者数のデータはいま、市町村別に公表されるようになった。わがまちの現状はどうか。対策はどうなっているか。住民として、気にかけて。統一地方選が近づき、よく耳にする「安心、安全」が必要なのは、交通事故や災害対策に限ったことではない。

基本法の原動力になった市民活動の広がりには勇気づけられる。

「自殺対策に取り組む僧侶の会」(東京)は、44人の集まりだ。面談や電話相談をするには人手が足りない。悩む人たちの手紙を受け付けることにした。受けた手紙は、3年で2500通。「やっと気持ちの届け先を見つけた」「だれにも言えなかった」などとある。僧たちは3人一組になり、相談しながら返事を書く。

代表の僧は49歳で、元IT企業幹部だ。仲間が参加しやすいよう、受けた手紙は電子化し、返事の文案もメールでやり取りしながら練る。最近、広告会社員らの協力で、僧が赤い郵便受けを持ってほほ笑むポスターも作った。

三重県の志摩市では老人会などで、地域のボランティアグループ「お達者サポーター」が紙芝居を演じ、うつ病などの早期相談を呼びかけている。手書きの絵に思いを込める。

ただ、手紙も紙芝居も参加者は女性が多い。自殺者の3分の2を占める男性がなかなか顔を出さない。そこで、秋田県藤里町の市民グループは、夜に飲酒OKのミニ会合「赤ちようちん よってたもれ」を始めた。自分史を語り合う何げない機会が、心を開く。

警察庁データで自殺原因の上位にあげられたのは、今回も「健康問題」であり、「経済・生活問題」だった。「就職失敗」も増加していた。

不況は続き、社会は高齢化する。苦しみはこの先も避けがたいだろう。孤族の時代と言われる今日、こうした人のつながりにこそ、瀬戸際の人間を踏みとどまらせる力があるだろう。

## 障害者雇用へ教委がセンター

中国新聞 2011年3月10日

山口県教委は4月、県と連携して障害者の雇用を促進するための「ワークセンター」を県庁内に新設する。各課から事務補助業務を募り、障害者の働く場を確保。県教委は障害者の法定雇用率を1994年以来、一度も達成しておらず、厚生労働大臣から3度、是正勧告を受けている現状の大幅改善を目指す。

教育政策課によると、ワークセンターには専従職員2人を置き、知事部局を含む各課から文書の発送やコピー、資料の作成や整理などの仕事を確保する。4月1日からは知的障害者6人を非常勤職員として1年間雇用する。月17日間勤務し月給は10万6千円。今月6日の採用試験には13人が受験した。

県立高7校でも、4月から知的障害者と身体障害者を計7人、3総合支援学校でも知的障害者計3人を非常勤職員として採用する。電話対応など接客や資料の作成、清掃管理などの業務を任せる。勤務条件はワークセンターの非常勤職員と同じ。採用試験には計53人が受験した。

県教委は「達成できない大きな要因は教員免許を持つ障害者が少ない」としてきたが、山口労働局は「正当な理由に当たらない」と是正を求めてきた。

教育政策課の山本康弘主任は「教職員採用予定の3人を含め、19人を雇用することで新年度の雇用率は1・7%になる見通し。いきなり2・0%の達成は難しいが、早く達成したい」と話している。

## グループホーム火災1年、再発防止策広がる 地域で消防訓練、スプリンクラー設置

読売新聞 2011年3月10日

地域住民らも参加して行われたグループホームの消防訓練(9日午後、札幌市北区で) = 三浦邦彦撮影

札幌市北区のグループホーム「みらいとんでん」で7人が死亡した火災から、13日で1年を迎える。火災を機に、同市内で地域住民も参加した消防訓練を取り入れた施設は7割と倍に加え、スプリンクラーの設置も進む。その一方、改善が遅れている施設もあり、再発防止への取り組みは道半ばだ。

火災現場と同じ屯田地区のグループホーム「ベル2」では9日午後、消防訓練が行われた。入居者9人と当直職員1人だけの夜間に出火したと想定し、施設と消防、地元町内会関係者ら計約20人が参加した。当直役の職員は119番と初期消火後、入居者を大声で起こして1人ずつ誘導。駆けつけた住民らと連携し、施設の外まで避難させた。

当直役を務めた森下正幸さん(44)は「昼間なのでスムーズにできたが、夜だったら慌ててしまう。普段から近所と交流を深め、見守ってもらえる関係をつくりたい」と話し、町内会の男性(64)も「訓練の回数を重ねて、イメージを膨らませることが大事だ」と語った。

同火災は当直1人の未明に発生し、スプリンクラーもなかったことから、入居者8人中7人が逃げ遅れた。同市が今年1月、市内のグループホームに行ったアンケートでは、火災前の2009年に住民参加型訓練を実施した施設は36・4%だったが、10年は70・6%に倍増。住民を交えた「運営推進会議」を年間5、6回開催した施設は、09年の56・3%から90%に増えた。

同火災をきっかけに、国は10年9月、スプリンクラーの設置義務のない275平方メートル未満の小規模施設も補助の対象に加えた。同市では39の小規模施設のうち、11年度末までに32施設が設置を終える見通しだ。

市消防局は今年2月、ストーブやコンロの安全な使い方など101項目を確認する「防火自主チェック表」を作成、市内の全235施設に配布した。同市は「運営者の意識や資金繰りの問題で、施設によって取り組みに温度差がある。引き続き再発防止策の徹底を図りたい」としている。

一方、道警は、業務上過失致死容疑の適用を視野に、グループホームの運営会社や施設管理者の女性、当直勤務の女性職員から事情を聞いている。施設1階居間のストーブから出火し、周辺にあった入居者らの洗濯物などに燃え移ったとみられ、防火態勢や避難経路の確保状況に不備がなかったかを調べている。



## 2台連動型のロボットスーツ = リハビリに应用期待 - 筑波大

時事通信 2011年3月10日

高齢者や障害者の歩行などを支援するロボットスーツ「HAL」を開発するベンチャー企業「サイバーダイン」(茨城県つくば市)社長の山海嘉之筑波大教授は9日、東京都内のシンポジウムで、下半身のリハビリに役立つ2台連動タイプを披露した。

理学療法士らが親機を装着して脚を動かすと、子機を装着した障害者らの脚が同じように動く。障害者が脚をうまく動かせない感覚を、子機から親機を通じて理学療法士にフィードバックさせる仕組みも導入したいという。



**福祉ナビ：色覚障害者に配慮したカラーユニバーサルデザインとは。**

毎日新聞 2011年3月9日

色覚障害者に配慮したカラーユニバーサルデザインとは。

色数絞りシンプルに 案内表示、電子掲示板...公共施設で普及

進む

地図、乗り換え案内、電子掲示板……。街にはさまざまな色の表示があふれているが、色を区別しにくい人にはかえって分かりづら  
いこともある。そこで注目されているのが、色覚障害があっても情  
報が伝わるように配慮した「カラーユニバーサルデザイン」(CUD)だ。公共施設などで取り入れる動きが広がりつつある。

山海嘉之筑波大教授が社長を務めるサイバーダイン社が開発したロボットスーツ「HAL」の2台連動型。親機(右)の動きに合わせて子機も動き、リハビリに役立つと期待される。9日午後、東京都港区の品川グランドセントラルタワー (時事)

東京都足立区の男性会社員(36)は、銀行や病院の窓口にある番号呼び出し機の数字が読み取れない。一般的な呼び出し機は黒いボードの表面に赤い光で数字が点灯するが、赤と黒を識別できない障害があるため、数字と背景の違いが分かりにくいのだ。

こうした住民の声を受け、区は09年、庁舎内の住民票窓口などにある表示機を数字が白色に点灯するものに変えた。男性は「これまでは自分の番号が来るまで機械の呼び出し音にずっと注意していなければならなかった。小さいことだが助かる」と話す。

足立区は08年以降、公共施設や住民サービスに順次CUDを導入している。その一つが防災マップ。以前は多くの色を使って避難所の区域を示していた。一般の人には見やすかったが、色覚障害のある人は紫とピンクの違いが分からず、緊急時に役立たない可能性があった。現在のマップは4色に絞り、白抜き文字なども多用して見やすくした。

昨春開校した足立区立の小中一貫校「新田学園」では、校内の案内表示板の配色をシンプルにし、現在位置だけをオレンジ色にして、白抜き文字で「現在地」と表示。トイレの位置も分かりやすくした。区学校施設課は「使う色をできるだけ減らし、知りたい情報が浮き出るようにデザインした」と説明する。

また、「学校の黒板の文字は白や黄色の見やすい色を使う」「カラー印刷物は明るい色同士、暗い色同士の配色を避ける」など、CUDを行政サービスに生かすための25項目のチェックリストを作成。職員らに徹底を求めている。

視覚障害のマークは「太陽」、聴覚障害は「鳥」、知的障害は「葉っぱ」……。今年4月に開校する神奈川県立相模原中央支援学校(相模原市)では、教室のドアを障害別に色分けするとともに、それぞれにシンボルマークをつけ、色覚障害がある子にも分かるよう配慮している。田中宏明教頭は「どんな障害があっても生活しやすいように工夫した」と話す。

神奈川県は09年に「みんなのバリアフリー街づくり条例」を制定。業者が病院やホテルなど公共性の高い施設に標識などを設ける際、県と事前協議することを義務付けた。

しかし、こうした自治体はまだ少数だ。NPO法人「カラーユニバーサルデザイン機構」の田中陽介事務局長は「CUDを担当する部署が福祉なのか都市計画なのかははっきりしな

いことも一因だ。先進的な自治体を参考に、行政組織の中で横断的に取り組んでほしい」と指摘する。

民間の取り組みは公共交通機関を中心に進んでいる。大阪と神戸、京都などを結ぶ阪急電鉄は昨年3月のダイヤ改正で、駅に掲示する時刻表案内板にCUDを導入した。

これまでの同社の時刻表は、特急の出発時刻を赤色、準急を緑色にしていたが、色覚障害がある京都市の白浜徹朗弁護士(51)が「赤と緑が区別できない」として、京都地方務局に人権救済を申し立てた。これを受け、同社は見分けやすい色調に変えた。

白浜弁護士は「私の場合、見づらいものは人間が作り出したものが多い。作り手が見やすいものを作るように配慮するだけで、世の中はもっと暮らしやすくなるのではないか」と話す。

都交通局でも大江戸線など4路線で、運賃の掲示板を色弱者が分かりやすいものに交換している。【中西拓司】

#### 先天性の色覚障害、男性の20人に1人

先天性の色覚障害は男性の20人に1人、女性の500人に1人の割合で起きると言われている。障害の程度が重く視界全体がモノクロに見えている人もいるが、大半の人は複数の色が組み合わさった時に識別しにくい程度という。

東京女子医大非常勤講師の中村かおる医師(眼科)によると、見えにくくなるのは、例えば(1)赤と緑(2)緑と茶色(3)青と紫...などが隣接した場合という。中村医師は「自分の見え方の特徴を把握しておくことも大切だ」と指摘する。

#### 木版画チャリティー展：清田雄司さん「障害者施設支援を」 橿原で11日から / 奈良 11～13日、県橿原文化会館で

毎日新聞 2011年3月9日

重度身体障害者通所施設「どんぐりの家」(田原本町秦庄)を支援する「清田雄司 木版画チャリティー展」が11～13日、橿原市北八木町の県橿原文化会館展示ホールで開かれる。通所者の親らでつくる「どんぐりの会」の創立25周年を記念して企画。収益は施設の運営費に充てる。

どんぐりの会は86年、磯城郡内の障害のある子供たちの父母が集まって結成。在宅の障害者らが社会的に自立できる作業所として、92年にどんぐりの家を建設した。通所者らが作るクッキーやマドレーヌなどは評判がよく、近くの飲食店などで販売されている。

版画家の清田雄司さん(79)は北九州市生まれで、奈良市在住。京都市立美大(現・京都市立芸大)を卒業後、桃山学院高(大阪市阿倍野区)で美術教師として教壇に立つ傍ら版画を制作。97年に退職した後も活動を続け、作品は英国の大英博物館にも収蔵されている。

清田さんが約20年前、同会の募金箱を見かけて連絡したのをきっかけに交流が始まった。施設に作品を寄贈し、05年にもチャリティー展を開いた。今回展示されるのは小品を中心に2万～8万円の作品24点で、清田さんは「多くの人に見に来ていただいて支援してもらいたい」と話す。

午前10時～午後6時(最終日は午後4時)。入場無料。問い合わせはどんぐりの家(0744・32・7398)【高島博之】

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行